

答え合わせ・解説

問1	答え 1 平氏	平安時代末期に平清盛を中心として権勢を誇りましたが、源頼朝や義経ら源氏との戦いに敗れました。また、平重衡による南都焼き討ちによって東大寺の大仏殿などが焼失し、これが鎌倉時代に重源らによって再建されるきっかけとなりました。
問2	答え 1 平等院鳳凰堂 — 浄土教	藤原氏が摂関政治で権勢を誇った時代、末法思想（仏教の教えが衰えるという考え）の影響で、死後の救済を求める浄土教が貴族から民衆まで広く浸透しました。藤原頼通は、この極楽浄土の様子を地上に再現しようと、池を中心とした浄土庭園を備える平等院鳳凰堂を京都の宇治に建立しました。選択肢にある中尊寺金色堂は奥州藤原氏によるもの、東大寺南大門は鎌倉時代の建築です。
問3	答え 1 仏教の力で国家を災いから守り、平和を維持しようと考えた。	最澄が比叡山に拠点を構えた背景には、鎮護国家の思想がありました。これは仏教が国家の保護を受ける代わりに、仏教の教えや修行によって国を安定させるという役割を担うものです。平安京の北東という方位に建立されたことも、都を災いから守るという意図が含まれていました。当時の仏教は、個人的な欲望を満たすための「現世利益」や特定の階級の繁栄よりも、まずは国家全体の守護という公的な性格が重視されていました。
問4	答え 1 朝廷が徴税の権限を国司に委ねたため、一部の国司が私欲のために過酷な取り立てを行った。	九世紀後半から十世紀にかけて、政府は戸籍に基づいた従来の徴税が立ち行かなくなったため、国司に対して「徴税の完遂」を条件に大きな権限を与えました。これを利用した国司は、規定以上の税を農民から徴収して蓄財に励むようになり、これに苦しんだ有力農民（田堵）たちが国司の解任を求めて朝廷に訴えるなどの事態が発生しました。この混乱が、自衛手段としての武力の保持、すなわち武士団の形成を促すこととなります。
問5	答え 1 貿易によって得られる莫大な利益を平氏一門の経済的基盤とし、また輸入された宋銭が国内で流通するきっかけとなった。	平清盛は、瀬戸内海の制海権を確保するとともに、大輪田泊（現在の神戸市）を大規模に修築して、宋との貿易を本格化させました。この貿易によってもたらされた「宋銭」は、のちに日本国内で貨幣として広く普及し、貨幣経済の発展に大きな影響を与えました。選択肢にある「勘合」は室町時代の日明貿易、「出島」は江戸時代の対外政策に関する記述です。
問6	答え 1 「北面の武士」と呼ばれる独自の軍事力を組織し、自らの身辺警護や寺社の強訴を防がせた	院政を行う上皇は、自らの権力を支えるために「院の近臣」と呼ばれる側近や、「北面の武士」という警護組織を配置しました。この北面の武士には、次第に平氏や源氏といった有力な武士が登用されるようになり、院政期における武士の社会進出を促すきっかけの一つとなりました。
問7	答え 1 平将門：国司などの地方官に対する不満を背景に、武士の力を結集して関東の独立を試みた。	平安時代中期には、地方の有力な農民などが武装して武士団を形成しました。平将門は関東地方で一族の争いや国司への不満を背景に反乱を起こし、一時は関東の大半を制圧して「新皇」と称しました。同時期には瀬戸内海で藤原純友も反乱を起こしており、これらは武士が歴史の表舞台に登場する重要な契機となりました。
問8	答え 1 藤原氏による摂政や関白の力を抑え、自ら実権を握るため	平安時代中期までは藤原氏が摂政や関白として実権を握る摂関政治が行われていましたが、白河天皇は位を譲った後も上皇として「院」で政治を行うことで、藤原氏の関与を排除し、独自の政治判断を下せる仕組みを整えました。